

# WCRP

World Conference of Religions for Peace Japan

**10**  
2024  
October  
No. 540



気候危機学習会で座談会に臨む参加者

こころの扉——『性暴力を防止する』という課題を考える」大嶋果織	2
第49回理事会	3
「気候危機学習会2024」を開催	4
WCRP国際委員会 国連「未来サミット」に向けたサイドイベントを開催	5
APWoFNが人身取引防止のワークショップをオンラインで開催	5
トルコ・シリア大地震への支援	6
平和研究所 第5回研究会 藤本頼生所員	7
平和のための国際会合「平和を想像する」で戸松理事長がスピーチ	7
新役員紹介	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8

## 「『性暴力を防止する』という課題を考える」

先日、すでに故人だが、貧しい人々と共に生きる活動で世界的に知られたキリスト教の男性聖職者が生前、多くの女性に性的暴行を働いていたというニュースが流れた。わたしはその運動に大変教えられてきたので、ショックを受けた。しかし、ウソでしょ？とは思わなかった。なぜなら、近年、キリスト教界では宗派を問わず、国内外を問わず、男性聖職者による性加害の事実が次々に明るみに出てきているからだ。今回のニュースもその一つである。

WCRP日本委員会  
理事 日本キリスト教協議会  
幹事 大嶋果織



大嶋果織

性暴力やセクシュアル・ハラスメントは、上司と部下、教員と生徒、コーチと選手など、日常的な権力関係の中で起こる。キリスト教会では、聖職者と信徒という関係がそれにあたる。一般的に神父や牧師などと呼ばれる聖職者は、神の言葉を伝え、信徒の信仰生活を指導する立場にあると考えられている。したがって、信徒は聖職者を尊敬し、その言葉に信頼を置いている。そのような関係の中で、「神のみこころ」「信仰を深めるため」などの理由で男性聖職者が子どもや女性信徒に性的行為を強要

したり、ハラスメントを繰り返したりすることがあるのだ。もともと権力関係の中にあるので、被害者は被害に気づきにくい。たとえ気づいて訴え出ても、まさか聖職者がそんなことをするわけがないと、却って疑われたり、非難されたりする。二次被害を受けるのである。

キリスト教界では1990年代以降、セクシュアル・ハラスメント防止のためのガイドライン策定、相談窓口・対応委員会の設置など、さまざまな対策が講じられてきた。しかし、被害の訴えは今も止むことがない。なぜなら、二千年の歴史を通して築いてきた男性聖職者中心の権力構造は簡単には変わらないからだ。また、キリスト教が依って立つ『聖書』そのものが、古代家長制社会の中で成立し、男性神学者によって解釈され教えられてきたという歴史もある。性暴力を無くしていくには息の長い取り組みが必要なのだろう。

そんな中で、わたしも加わっている運動がある。「さんづけ」運動だ。聖職者であろうが信徒であろうが、互いを「先生」ではなく「さん」で呼ぶ。それによって、あなたもわたしも神の前に対等な関係であることを確認していく。こうした小さな営みが性暴力やハラスメントを生み出す権力構造を変えていく一歩になるのではないかと思っている。

キリスト教のことばかり書いてしまったが、他の宗教教団ではどうなのだろうか。性暴力やセクハラ防止は宗教を横断する課題のように思えてならない。

## 第49回理事会

第49回理事会が9月10日、龍谷大学大宮キャンパス東翼（京都府京都市）でオンラインを併用して開催された。理事20人が出席し、「日本委員会人事」「平和のためのAI倫理…ローマからの呼びかけにコミットする世界の宗教」「能登半島地震への対応」「WCRP運営の改善にむけて」「2025年度の活動について」「1月31日評議員会・理事会・新春関連行事」を審議し、すべて可決された。

理事会の冒頭、受け入れ教団を代表して浄土真宗本願寺派総務の弘中貴之理事があいさつした。また、6月19日に開催された第28回評議員会で議長（WCRP日本委員長）に選出された天台宗妙法院門跡門主の杉谷義純会長が理事会冒頭にあいさつを行い、「WCRP日本委員会は1970年の創立以来、諸先達の方々とさまざまな活



杉谷会長の挨拶

動を行って来た。一年、昨年は、紛争当事国の宗教者を東京に招き、諸宗教平和円卓会議を開催した。世界平和から見れば微力では

あるが、このような小さな取り組みを積み重ねて、長い大きなつながりを持つていきたい」と述べた。

その後、戸松義晴理事長の進行で議事が進められた。「平和のためのAI倫理…ローマからの呼びかけにコミットする世界の宗教」では、7月9日から10日に広島市でWCRP日本委員会、教皇庁生命アカデミー、アブダビ平和フォーラム、イスラエル諸宗教関係首席ラビ委員会との共催で開催され



理事会の様子

た会合の詳細が説明された。同会合に参加した理事から感想が述べられ、AI社会において求められる行動規範や倫理について意見が交わされた。また、8月21日に杉谷会長、戸松理事長、庭野光祥理事が首相官邸を訪れ、岸田文雄首相と面会したことが報告された。

「能登半島地震への対応」では、1月18日から支援金勧募を行い、7月末時点で8,036,373円の支援金が寄せられたことが報告され、災害時に特別な配慮を必要とする人びとへ緊急支援に加えて、中部臨床宗教師会が避難所で開催する傾聴カフェ事業へ100万円の継続支援を行うことが決

定した。

「WCRP運営の改善にむけて」では、第48回理事会（6月4日）での議論を受けて、①2025年度以降の理事会の開催回数と方法、②会報のペーパーレス化と発行回数、③事業内容の整理、絞り込み、④賛助会員の拡充について、社会の動向や組織の現状に合わせて検討し、運営改善に取り組みることが承認された。理事からは、支出を削減するのみならず、収入を増やす方法についても検討する必要があることが述べられた。

また、来年1月の理事会、評議員会で2025年度の事業計画と予算を策定するために、2025年度に想定される活動内容について議論し、第3回東京平和円卓会議、AI倫理国際会合フォーアアップ、戦後80周年関連行事、日韓宗教指導者交流等の活動について意見交換を行った。

報告事項では、理事長業務執行状況、2024年度年

間予定、定款施行細則の改正（就業規則）、会員会員拡充にむけた取り組み、国際事業、特別事業部門、常設機関からの報告が行われた。



龍谷大学大宮キャンパス東翼

## 「気候危機学習会2024」を開催

気候危機タスクフォース（以下、同TF）は9月12日、「気候危機学習会2024」をオンラインで開催し、約70人が参加した。テーマは『原発問題を倫理的視点から再考する』。

同TFメンバーの八坂憧憲師（中山身語正宗本部長）の総合司会の下、田中庸仁師（真生会会長／同TF責任者）より開会挨拶、高地敬師（日本聖公会京都教区主教／同TF運営委員）より趣旨説明がなされた。その後、日本キリスト教協議会「平和・核問題委員会」前委員長の内藤新吾氏（日本ルーテル教会総台教会牧師）が登壇し、基調講演を行った。



講師の内藤氏

内藤氏はまず、ドイツのドキュメンタリー映画「イエローケーキ」を取り上げた。ウラン鉱山の採掘によって環境のみならず地域コミュニティに影響を及ぼしている実態を明らかにしており、「平和利用だったらいけないというものではないというところがこの映画から分かる」と内藤氏は強調した。自然界に存在するウラン

の半減には約45億年かかり、これはほぼ地球の歴史と同じ年数である。原発使用で発生した廃棄物（核のゴミ）の直接処理には10万年、再処理の場合は100万年を要することに言及、「放射性物質を含んだステンレス製容器が水と触れると腐食が進む事例を踏まえ、内藤氏は「地震大国で地下水が豊富な日本では保管に適する場所がない」と指摘し、「誰が責任をもつて管理するのか」と訴えた。このあと内藤氏は、原発があるスポットを示した世界地図を紹介し、「地震の多発する海岸線沿いかつ大陸プレート上で原発を稼働しているのは日本だけである。このような環境において、原発を認めるかどうかというのは倫理的な問題となるだろう」と原発の利用には改めて慎重であるべきことを強調した。

このあと、「宗教者からの応答」と題して、質疑応答を交えた座談会に移った。田中師は、身内に福島から避難している方がいることを紹介した上で、脱原発を推し進めるのは政治家の力も必要不可欠であり、選挙で脱原発を訴える方に一票を投じることがまずは大切であると訴えた。

赤井悠蔵師（カトリック東京大司教区大司教秘書・広報／同TFメンバー）は、復興支援活動の際に福島第一原発事故による帰宅困難区域で見た自身の体験を語った。



学習会の様子

高地師は、9月に入ってもなお真夏日が続く、人類の身体のみならず、取り巻く産業にまで影響を及ぼしていることについて、次世代エネルギーの必要性を訴えた。

水谷周師（日

本宗教信仰復興会議理事長／ストップ！核依存タスクフォースメンバー）は、原発とイスラームの関係について紹介。自然は主の創造によるものであり、自然を破壊したり根本秩序を変えたりするのは悪行であると聖典（コーラン）に記述されていることから、教義面からも認められない部分があると説明した。

國富敬二師（立正佼成会徳島教会会長／同TFメンバー）は、原爆の延長線上に原発がある歴史的な捉え方があるにもかかわらず、クリーンエネルギー開発を政府が制限していることに疑問を呈した。

最後に同TFメンバーである田爪希依師（立正佼成会調布教会教会会長）が閉会あいさつを述べ、学習会が終了した。

## WCRPP国際委員会 国連「未来サミット」に向けたサイドイベントを開催

9月22日から23日に国連本部で開催された「未来サミット」では、SDGs、パリ協定の達成や、世界的な新たな課題解決に向けた行動指針「未来のための協定」が採択された。WCRPP国際委員会は同サミットの開催に併せてサイドイベントを行った。

9月20日午前、国連環境計画、国連諸宗教諮問委員会共催で「未来のための協定に向けた信仰に基づく解決策」をテーマに国連プラザでサイドイベントが開かれた。エリナス・シュチニツキ氏(WCRPPラテンアメリカ・カリブ海地域事務総長)は、「未



午前のサイドイベント

来のための協定」が多国間主義を推進する中で、諸宗教間の協調が特に必要とされるとあいさつに立った。

午後には、WCRPP国際委員会とイスラーム青年協力フォーラムとの共催で「世紀最大の課題に対する諸宗教青年の応答・未来サミットへの信仰に基づく貢献」が開催された。主催者を代表しフランシス・クリリアWCRPP国際事務



あいさつに立つクリリアWCRPP国際事務総長

務総長が開会あいさつに立ち、世界の諸課題は政府と市民社会の協働なしに解決はあり得ない」と述べ、特に青少年の声と共に未来を

決定しなければならぬと強調した。同イベントには、WCRPP国際青年委員のバス・バンドウ氏(メキシコ)、メリリン・チャライ氏(南アフリカ)がオンラインで登壇した。

## APWoFNが人身取引防止のワークショップをオンラインで開催

9月24日から26日、アジア太平洋女性信仰者ネットワーク(APWofN)主催の人身売買禁止ワークショップがオンラインで開催された。人身取引防止の活動を具体的に各国で進めていく上で必要なロビー・アドボカシー活動に重点を置き、少人数で能力開発を行うことが目的。

WCRPP日本委員会女性部会からは、APWoFN事務局長を務める河田尚子副部長、人身売買禁止タスクフォースメンバーの小宮山延子委員が参加した。

1日目は、13か国から最大32人が参加。



APWoFNワークショップの参加者

インドネシア、日本、ネパール、インド、フィリピンにおけるそれぞれの人身売買の状況とそれに対する市民社会や政府の取り組みと課題が共有された。

2日目は、人身売買に関するロビー・アドボカシー活動の実例を学んだ。午後には2つのグループに分かれてディスカッションを行い、人身売買の原因について、APWoFNとしてロビー・アドボカシー活動を具体的にどのように展開できるかなどを話し合った。

3日目は、ロビー・アドボカシー活動におけるAPWoFN各国メンバー間のネットワーク形成と協力、次年度の主要議題とそれをいかに実現するかについて議論した。参加者からは人身売買に関する学術研究の強化、警察と連携した被害者の保護や情報収集、アジア宗教者平和会議(ACRP)内での人身売買対策の体系化、研究者と現場をつなぐプラットフォームの構築、人身売買防止ツールキットの共有、日常の祈りの中で人身売買の被害者に想いを寄せるなど活発にさまざまな取り組みが提案された。

## トルコ・シリア大地震への支援

2023年2月6日に発生したトルコ・シリア地震に対し、WCRP日本委員会は被災者支援のための勸募金の呼びかけを行ない、総額49,409,305円の浄財が寄せられた。現在までに、現地において被災者支援に取り組む国内外10団体に対し11件、総額28,037,350円の支援を行った。

この度、WCRP日本委員会が支援を行なってきた現地NGO団体のキッズ・レインボーより6カ月に及んだ支援事業の最終報告書が提出されるとともに、事業継続のために追加支援の要請が寄せられた。WCRP日本委員会は、事業継続の必要性を鑑み、さらに6カ月の事業継続に必要な2万3千ユーロ（約360万円）の支援を決定した。

## ■キッズ・レインボーと支援事業

トルコ南部の中核都市であるガジアンテプは、200万人の住民のうち少なくとも50万人がシリア難民と言われる。キッズ・レインボーは、正式な学校に通うことのできない1000人を超える難民の子どもたち（ほとんどがシリア人）を受け入れ、語学クラスやレクリエーション活動を提供して来



参加する母親たち

関係、社会的孤立や経済的に困難な状況に置かれている。子供たちも、学校中退、早婚、児童労働や戦争のトラウマによる心的外傷後ストレス障害（PTSD）などの問題を抱えていた。地震の発生は、これらの状況と問題を悪化させた。

キッズ・レインボーは、これらのトラウマ体験、長引く不安、不快感、抑うつなどの症状を和らげるために、子どもたち及びその家族に対し、専門の心理カウンセラーによりセッションを運営し、改善をはかるための精神的社会的支援（PSS）事業を6カ月間行なってきた。以下にその一例を紹介する。

●**選択性緘黙症と自閉症スペクトラムの症状の少年**

8歳の男の子は、選択性緘黙症と自閉症の可能性のある症状を示していた。選択性

た。  
シリア  
難民の人  
びとは、  
トルコ語  
のスキル  
も乏しく  
トルコ人  
との緊張  
関係、社会的孤立や経済的に困難な状況に置かれている。子供たちも、学校中退、早婚、児童労働や戦争のトラウマによる心的外傷後ストレス障害（PTSD）などの問題を抱えていた。地震の発生は、これらの状況と問題を悪化させた。

緘黙症は、特定の社会的状況において話すことができない重度の不安障害である。この症状は、地震によって家を失い、瓦礫の下に数時間とどまるという体験によって悪化した。彼は社会的引きこもり、反復行動、新しい環境に適応することの極端な困難さの兆候を示しており、これは自閉症スペクトラム障害と同化する可能性がある。

この子に対し心理士は、行動療法と新しい心理療法を組み合わせて、子供が社会的な交流に参加し、コミュニケーション・スキルを身につけるよう促した。音楽療法は、安全で心地よい方法で感情を表現し、不安を軽減するための非言語的手段として導入された。少年は、セラピーへの参加意欲の向上や社会的関与のわずかな改善など、進歩の兆しを見せ始めているが、今後も彼の状態を継続的、専門的にサポートする必要がある。



セッションを受ける子どもたち

## 平和研究所第5回研究会

### 藤本頼生所員

第5回研究会は9月24日、普門メディアセンター（東京・杉並／オンライン併用）で開催され、藤本頼生所員（國學院大學教授）が『仁慈と博愛―昭憲皇太后を通じて考える人間性の回復―』と題して発表した。藤本所員は、明治天皇の皇后であった昭憲皇太后の御事績における仁慈と博愛の精神を通じて、人間性の回復という問題を考えてみたいと述べた。

藤本所員はまず、五撰家のひとつ一條家の三女として生を受けた昭憲皇太后の生涯とその人柄について言及した。父忠香は子どもたちへの教育に熱心であり、幼いころより和学、漢学、筆道、お茶や琴などを習わせ、昭憲皇太后は早くから才女として知られていたという。一方で、邸内に物見台を設け、庶民の暮らしぶりを見せていたという。このように育てられた故か、浜離宮から馬車で還啓の際、にわか雨のため濡れになった小学校の児童と先生に傘を与え、一同感涙したとの象徴的なエピソードを紹介した。

次に、福祉・社会事業が未発達な近代において、社会事業に積極的にかかわったことを述べた。特に、日本赤十字社の前身であり、西南戦争の傷病兵の救護を目的とし

設立された博愛社への慰問品の中に、葡萄酒やたばこに加え、自ら縫製した綿撤糸（包帯）を含ませたという。さらに、昭和45年5月にワシントンで開催された第9回万国赤十字総会に提議し設立された「昭憲皇太后基金」の提議文にある、「各国が国境を越え、平時救護事業を目標として共有し、一丸となって協力することは国際親善にも資する」との「思召」は、昭憲皇太后の仁慈の深い思い、社会救済を実践する意思をうかがい知ることができるとした。

最後に、昭憲皇太后の御事績に学び、人々が人間性の回復に努めることが、今後の世界平和のためにも大切なことであると述べた。

### 平和のための国際会合「平和を想像する」で戸松理事長がスピーチ

9月22日から24日フランス・パリで開催された聖エジディオ共同体主催の平和のための国際会合「平和を想像する」において、WCRP日本委員会の戸松義晴理事長がスピーチを行った。この国際会合は、ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世の提唱によって1986年10月イタリア・アッシジで開かれた「世界平和の祈りの集い」の精神を引き継ぐもので、その後38年にわたって開催されてきた。

今回の国際会議の開会式では、エマニユ



エル・マクロン大統領が登壇し、この会合が歴史的に希望の象徴ともなったパリで開催することの意義を強調した。そして、「戦争は相手の人間性を奪うもの

あるため、私たちの視点を人間的なものに戻すこと、戦争は相手を破壊しようとするものであるため、共存するために相手を認めること、そして平和は創造的な努力によつてのみ生まれるものであるため、平和を想像すること」であると語り、平和構築への連帯責任を呼びかけた。

会合3日目、パリ市庁舎で開催されたフォーラム「共生に向けて」で戸松理事長が講演した。平和の心を大切にしよう人間同士の共生、万物に神聖が宿ると捉える自然との共生、そして最先端技術における倫理の確立と将来世代との共生の3つの重要性について言及した。その中で、7月広島でWCRP日本委員会が主催した国際会合「平和のためのAI倫理」における議論の意義について報告した。また、会合2日目フォーラム「貧困と平和」では篠原祥哲事務局長が発表した。

## 新役員紹介

新たに就任したWCRP日本委員会の役員を紹介する。

### 評議員

鈴木裕治（妙智會教団理事）



鈴木評議員

昭和58年、妙智會本部に奉職。音楽隊部長、青年本部長、ありがとう基金（現ありがとうインターナショナル）事務局長、本部事務局総務部長、本部事務局長を歴任。平成23年に理事就任。

浜島典彦（身延山久遠寺総務）



浜島評議員

昭和26年に三重県桑名市で出生。昭和49年立正大学仏教学部卒業、昭和52年立正大学大学院文学研究科仏教学専攻修士課程修了。日蓮宗熊谷学寮寮監、立正大学仏教学部講師、日蓮宗宗務院伝道企画課長、身延山大学長、身延山久遠寺副総務兼共栄部長を歴任。平成16年から28年まで東京都荒川区保護司も務める。現在、修性院住職、身延山大学名誉教授。令和6

年3月より身延山久遠寺総務。

### 理事

橋重十九（北野天満宮宮司）



橋重理事

昭和23年生まれ、石川県出身。延喜式内社宮司世家二十五代に生まれる。会社員を経て昭和49年より北野天満宮に奉職。禰宜、権宮司を経て、平成18年から現職。その間、北野天満宮ボーイスカウトの創設に尽力。京都府神社スカウト協議会会長として青少年育成活動に努めた。全国天満宮梅風会会長。京都府神社庁理事。

### 今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し新しい熟語を作ります。

#### 貴網（きもう）

APWOFNやWCRP国際委員会の方々の交流を通して、WCRPには貴重なネットワークが張り巡らされていて、そのご縁をいただいていることを感じました。

## WCRPの活動

### 《10月》

1日 気候危機タスクフォース「いのちの森プロジェクト」森の整備（埼玉・所沢）

※18日も実施

7日 気候危機タスクフォース「いのちの森を守る会との懇談会」（埼玉・所沢）

11日 ストップ！核依存タスクフォース第3回会合（オンライン）

15日 青年部会KCRP青年部会とのミーティング（オンライン）

22日 平和研究所第6回所員会議・研究会

26～27日 和解の教育タスクフォース第2回ファシリテーター養成セミナー

### 《11月》

7日 青年部会第2回幹事会（京都・清水寺）

8日 バグウォッシュ公開講座第2回（オンライン）

14日 災害対応タスクフォース被災地訪問（石川県・輪島）

21日 人身売買禁止タスクフォース第2回会合

25日 女性部会宗教別学習会（横浜）  
26日 平和研究所第7回所員会議・研究会  
掲載内容の無断転載を禁ず。